

速報展 2009.3.20(祝)～6.28(日)

無料 Take Free

# 発掘された鈴鹿 2008

★永い眠りから覚めた竪穴住居が50棟！  
現代の住宅街と弥生時代の住宅街



■岸岡山Ⅲ遺跡 航空写真

## はじめに

鈴鹿市考古博物館が1998年に開館して以来、毎年恒例になりました速報展「発掘された鈴鹿」は、今回で11回目を迎えました。2008年は、石薬師東遺跡・伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）・伊勢国分寺跡・門山遺跡・萱町遺跡・岸岡山Ⅲ遺跡・国分遺跡・沢遺跡・沢城跡・富士遺跡・八重垣神社遺跡の11遺跡（14調査区）で発掘調査を行いました。このうち9遺跡（11調査区）が開発に伴う調査であったため、残念ながら遺跡は破壊され、消

滅してしまいました。速報展では、姿を消してしまったこれらの遺跡から出土した遺物とともに、遺構の詳細や発掘調査現場の様子などを写真パネルにしていち早く皆様にご紹介します。

展示を心ゆくまでご覧になり、鈴鹿に暮らした私たちの祖先が残した足跡を振り返っていただくとともに、郷土の貴重な埋蔵文化財への保護についてご理解を一層深めていただくことを心から希望します。



鈴鹿市考古博物館  
Suzuka Municipal Museum of Archaeology

〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地  
TEL 059-374-1994 FAX 059-374-0986  
E-mail : kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp  
URL: <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>

## ■岸岡山Ⅲ遺跡 (第2次)

岸岡町字雲雀山

平成19年11月20日～平成20年3月26日 宅地造成に伴う緊急調査

調査地は、伊勢湾を望む岸岡山丘陵の高台に立地し、集落を営むのに絶好の南向きの斜面にあります。調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居50棟をはじめ、古墳時代後期の古墳1基、他にも掘立柱建物・溝・柱穴などが見つかりました。竪穴住居の規模はほとんどが一辺5m前後ですが、一辺7mを超える大型住居もあります。遺存状態が良好な住居が多く、検出面から床面までの深さは北壁で平均0.4mあり、深いものでは1m近くまで達します。付属施設には炉や壁溝、主柱穴が見られます。また、壁溝と繋がって斜面下へ流れる屋外溝を持つ住居があり、傾斜地における排水・防湿方法などに工夫が見られます。また、同一箇所における拡張や建て替えが行われた住居もあります。



■調査区全景

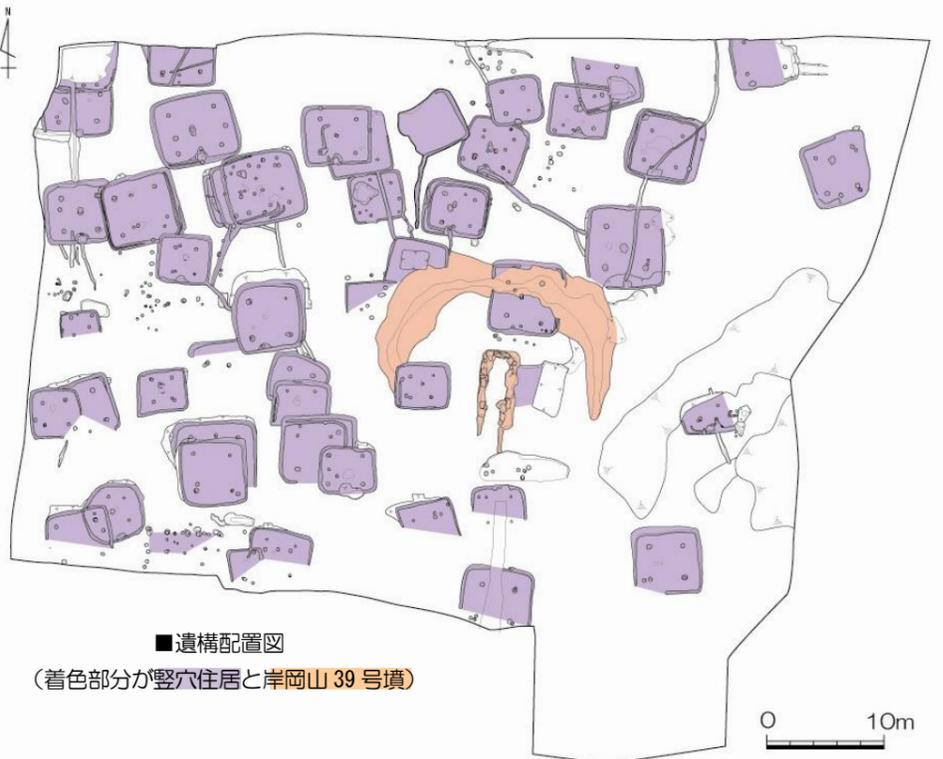


■排水溝を持つ竪穴住居

遺物は弥生土器が大部分を占めますが、他に玉砥石(といし)(筋砥石)や荒く割られた水晶剥片、磨製石斧(ませいせきふ)、用途不明の土製品、また加工・使用の痕跡は乏しいものの、軽石もたくさん出土しています。平成9年実施の第1次調査の結果から、注目されていた玉つくり関係の遺物については、点数は少ないものの必要となる素材(水晶)と道具(玉砥石)が出土したことになり、加工品や完成品は見つかりませんでした。第1次調査の成果などから調査地で玉つくりが行われていた可能性が一段と高まりました。



■用途不明土製品



■遺構配置図  
(着色部分が竪穴住居と岸岡山39号墳)

古墳の埋葬主体部は、東西3.3m×南北8.9mの右片袖式横穴式石室と呼ばれるタイプです。玄室を中心とし、羨道(せんどう)や古墳周溝を確認しています。しかし、後世の攪乱(かくらん)によって墳丘は削られ、羨道及び古墳周溝の南部も失われ、羨門の確認にも至りませんでした。また、石室を構成していた奥壁・側壁の基底石も抜き取られ、その痕跡だけが残っています。玄室の床面に拳(こぶし)大の礫(れき)敷きを確認しましたが、多くは原位置を保つものではありませんでした。古墳周溝は墳丘想定部の北側を巡り、検出した規模は全長30.5m、幅2.5～4.2m、検出面からの深さは0.3～0.7mを測ります。玄室からはこの地域で生産されたと見られる須恵器に加え、刀子が出土しています。これらは埋葬時に副葬されたものと考えられます。玉類の出土はありませんでした。岸岡山古墳群としては39号墳となりますが、横穴式石室を主体部とし、周溝を備えるものは、この古墳群で初の事例となりました。



■古墳埋葬主体部

## ■門山(かどやま)遺跡

平野町字門山

平成20年5月12日～5月15日 個人住宅建設に伴う緊急調査



■調査区位置図

門山遺跡は鈴鹿川右岸に位置し、西側には室町時代から戦国時代にかけての平野城跡が隣接しています。周辺での調査はこれまで行われていませんが、調査地内には1.5m程の比高差を持つ高まりが2箇所(門山1・2号墳)残っており、その形状などから古墳と推定され、門山古墳群として登録されていました。

今回の調査は、この高まりが本当に古墳であるのかを確認することを目的として実施しました。調査地内に、幅約1mの試掘溝を8箇所設定し、最初に東側にある門山2号墳の確認を行い、その後、西側の門山1号墳の調査を進めました。調査の結果、土壘とそれに伴うと考えられる溝を確認しました。土壘は旧地表面である、いわゆる黒ボク層の上に黄色と黒色の土砂を混ぜながら、1m以上の高さに造り出しています。また、溝を部分的に掘削した結果、山茶碗や土師器皿などが出土しました。これらのことから判断して、現在確認できる2箇所の高まりは、今までに周知されてき



■調査区遠景



■1号墳 断ち割り(右上)

■2号墳 断ち割り(右下)



た古墳ではなく、後世に土砂が流出した結果形成されたもので、本来は一続きの土壘であったものと推定されます。この土壘は平野城跡との位置関係から城の北側を囲む土壘の延長だと判断されます。調査地の西側には南北方向にのびる土壘も残っていることから、西側の土壘に囲まれた範囲とは異なる、二の丸のような別の区画が広がっていた可能性が考えられます。土壘の東端は土取りのため本来の形状を失っているものの、土壘の基底付近で南北にのびる幅1.5mの溝が確認できることから、土壘がそこから南方向へ折れていた可能性が指摘できます。一方、土壘の北側は急斜面となって鈴鹿川の形成する低位段丘面へ続いており、現在でもその比高差は数m以上あります。さらに、その上に高さ1m以上ある土を盛って土壘を形づくっていることから、平野城が堅固な構造であったことが分かりました。

## ■ 沢城跡 (第1・2次)

飯野寺家町

第1次：平成20年1月10日～2月2日

倉庫建設に伴う緊急調査

第2次：平成20年11月28日・12月17日

下水管布設に伴う緊急調査

鈴鹿市の中心地である神戸地区は、戦国時代以来の神戸城の城下町として発展してきました。調査地は、神戸城が築城される以前に、神戸氏が代々居城していた沢城跡の推定地として周知されています。

第1次調査の結果、確認できた遺構は縄文時代や弥生時代、そして近世以降の土坑がありましたが、これらはごくわずかで遺構のほとんどが沢城に関連するものでした。これらの遺構の時期は、出土遺物からおおむね15世紀後半～16世紀前半にかけてのものだと判断できます。



■見つかった柱穴



■沢城の築城の際の範囲を示す盛土

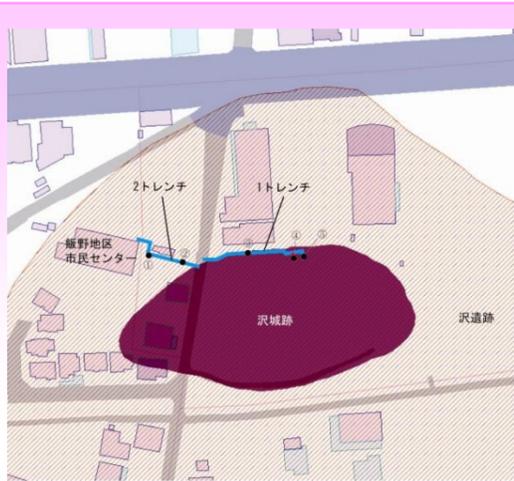
調査区の制約から、掘立柱建物などの沢城内部の構造を把握することは困難ですが、柱穴を多数確認していることから、何度か建て替えながら継続して利用されていたことが推定できます。また、今回の調査で最大の成果は、下部構造が版築によって築城されていることが確認されたことと上下2時期の遺構面が確認できたことです。沢城の周辺にはその名が示す通り、沼状の湿地が広がっていたことが分かっていますが、調査地内で黄褐色砂礫混シルト層の地山が確認されたことで、沢城築城の選地にあたって安定した地盤が存在する場所を選んでいることが明らかになりました。

また、遺構と整地層との重複関係から少なくとも2時期の遺構面が存在し、上層では大規模な整地の痕跡が確認されるとともに、建物も建て替えられていると推定されました。その時期については、出土した遺物から、16世紀前半頃に行われたものと推定されます。なお、それ以前の時期の遺物は極めて少なく、沢城の築城がどこまでさかのぼるのかは即断できませんが、今後とも追及すべき課題です。

出土遺物の中で最も多かったものは、15世紀(室町時代)を中心とした土師器皿であり、総数の9割以上を占めます。この他にも土師器鍋や羽釜、常滑産の陶器(こね鉢)や瀬戸・美濃焼の碗、青磁、瓦質土器、木製品が出土しています。また、沢城築城以前の堆積層からは縄文土器、弥生土器、須恵器も出土しています。



■土師器皿の出土状況



■調査地位置図

第2次調査は調査地が2箇所あり、東側が1トレンチ、西側は2トレンチです。1トレンチは第1次調査の北側隣接地で、沢城を築城する際に積んだと考えられる盛土と堀の境と推定される場所でした。また、2トレンチは沢城跡の西側の堀部分に相当し、沢城の盛土と堀との境を確認できる可能性があります。

調査の結果、1トレンチの北側には、一部に湿地状の堆積が広がっていることが確認されました。この結果と第1次調査の成果から、現在まで残されていた高まりが、ほぼそのまま北側の曲輪(くるわ)の範囲を示すと考えられるようになりました。

一方、2トレンチでは全てが湿地状の堆積であることから、この場所が堀として機能していたことを確認しましたが、曲輪が西側にどこまで広がっているのかは確定できませんでした。ただし、今回の調査結果から、それ程大きく西側へ拡張するものでないことが明らかとなりました。おそらく、沢城跡の西側を南北に通っている道路の辺りにその境界があるものと推定されます。

## ■ 謎の城 沢城

沢城あるいはその城主とされる神戸氏に関わる記録類は少なく、ある程度信頼できる文献としては、文明6年(1474)に長野氏が南職田の税金を神戸氏に妨害されて困っているとの文書(「光明寺文書」『鎌倉遺文』)が残っている程度です。最も詳しく書かれている記録類は『神戸録』ですが、これは幕末に書かれたもので、300年以上も前の出来事を記した記録であること



■沢城址の石碑(石碑の向こう側が調査地)

から、どこまで史実を反映しているのか疑問が残ります。また、部分的ながら、『伊勢軍記』などにも、神戸城移転の記述がみられますが、これらも近世の軍記物であることから、やや信憑性に欠けることがあります。以下、『神戸録』に書かれている内容をもとに、沢城に関する記述を追ってみます。

『神戸録(龍光寺本)』によると、神戸氏はもともと関氏(古くは平資盛の一族)の氏族であり、関盛政(実治)の頃に5人の子どもたちに領地を分け与えたといわれます。その内、長子であった太郎盛澄が河曲郡神戸の地を与えられ、神戸氏を名乗るようになりました。盛澄は鈴鹿・河曲郡の内の24郷を有し、手勢はおよそ1,000人あまりであったということです。

この頃に、盛澄が神戸のどの地に居城を構えたかについては明らかになっていませんが、3代後の具盛の頃(1550年前後)に沢城から神戸城に移ったとありますので、盛澄に領地が分けられた正平22年(1367)頃に沢城に入ったものと考えられています。その後は、実重、為盛、具盛の4代、約200年間にわたって沢城を居城としましたが、この間が1代50年となってしまう、疑問視されています。高野家譜では実重と為盛の間に2代を数えており、こちらの方が現実近く、神戸録にも記されていない歴史があったものと考えられます。

なお、3代為盛には子がいなかったため、伊勢国司である北畠教具の第二子、具盛を養子として迎えています。あるいは政具の末子ともいいますが、この4代具盛の頃(1550年前後)に神戸城へ移ったとされます。ただし、神戸城への移転は、『神戸平原郷土史』では1代おいた6代利盛の弘治元年(1555)となっており、はっきりとしませんが、『伊勢軍記』にも、具盛の時に神戸城へ移動したとの記述があることから、この前後に沢城から神戸城へと移ったことは確かでしょう。

このように、沢城がいつ築城され、どのような構造をしていたのかについてはほとんど不明といっても過言ではありません。これまでは、現在に残っている小字名や過去の地形などから、この地が沢城だと推定されてきましたが、発掘調査されたこともなかったため、詳細については長く不明でした。

## ■ 沢遺跡

西條町宇東澤

平成20年4月8日～4月14日 店舗建設に伴う緊急調査

調査地は沢城跡第1次調査地点から東70mの場所です。試掘坑を44箇所設定し調査を行いました。調査の結果、遺構としては明確なものは確認できませんでしたが、西側に設けた試掘坑において、沢城の旧地形が急に落ち込んでいく様子が見られました。落ち込みは自然に傾斜しているもので、人為的に堀を掘削したような痕跡は確認できませんでした。このことから、沢城はこれまでに言われてきているように、自然地形の湿地をそのまま利用した堀を持つ構造であったものと推定されます。

遺物がたくさん出土した高さは海拔8m付近です。この高さが、沢城の機能していた当時の堀の高さに相当するものと考えられます。沢城跡第1次調査の成果から、沢城の遺構面の高さが10m付近であることが分かっており、堀の最深部と沢城の遺構面とは2m以上の比高差をもつことになります。このことから沢城の堀は、現在の地形から類推する以上に防御的な機能を持った堀であったことが判明し、沢城の構造の一端が明らかとなりました。

出土遺物で最も多かったものは、15世紀前後(室町時代)を中心とした土師器の皿で、総数の9割以上を占めます。他にも山茶碗や用途不明の薄い板状の木製品が数点見られます。また、鈴鹿市では3例目となる漆器の破片も出土しました。



■出土した漆器破片



# ■伊勢国分寺跡 (第35次)

国分町字堂跡

平成20年7月14日～平成21年3月終了予定 学術調査

伊勢国分寺跡は大正11年に国の史跡に指定され、昭和63年度から実施された範囲確認調査では築地塀に囲まれた約180m四方の伽藍地が明らかになりました。平成11年度から7年をかけて伽藍配置の確認調査を実施しました。その結果、講堂・金堂・中門・南門・僧坊などの位置や規模がほぼ判明しました。塔の位置が未確認であるものの、伽藍地東半には「小院」・「北東院」などの区画があることも分かってきました。

平成18年度には国史跡伊勢国分寺跡保存整備検討委員会を組織し、平成27年度完成をめざして歴史公園の整備に取り組むこととなりました。今回の調査は、整備の最終的な資料を得るため、最も保存状態の良い講堂基壇の構造や小院・北東院の詳細などを確かめるため実施したものです。

**講堂** 調査の結果、南・北面を中心に延石状に並べられた埴(せんの)の列が見つかりました。使われている埴は断面が台形となるもので、全国に例を見ない特異な講堂基壇の構造が明らかとなりました。北面の埴列には2段目が残存していることから、少なくとも2段は積まれていたことが想定できます。埴は大部分が下底面を外側に向けて配置されています。



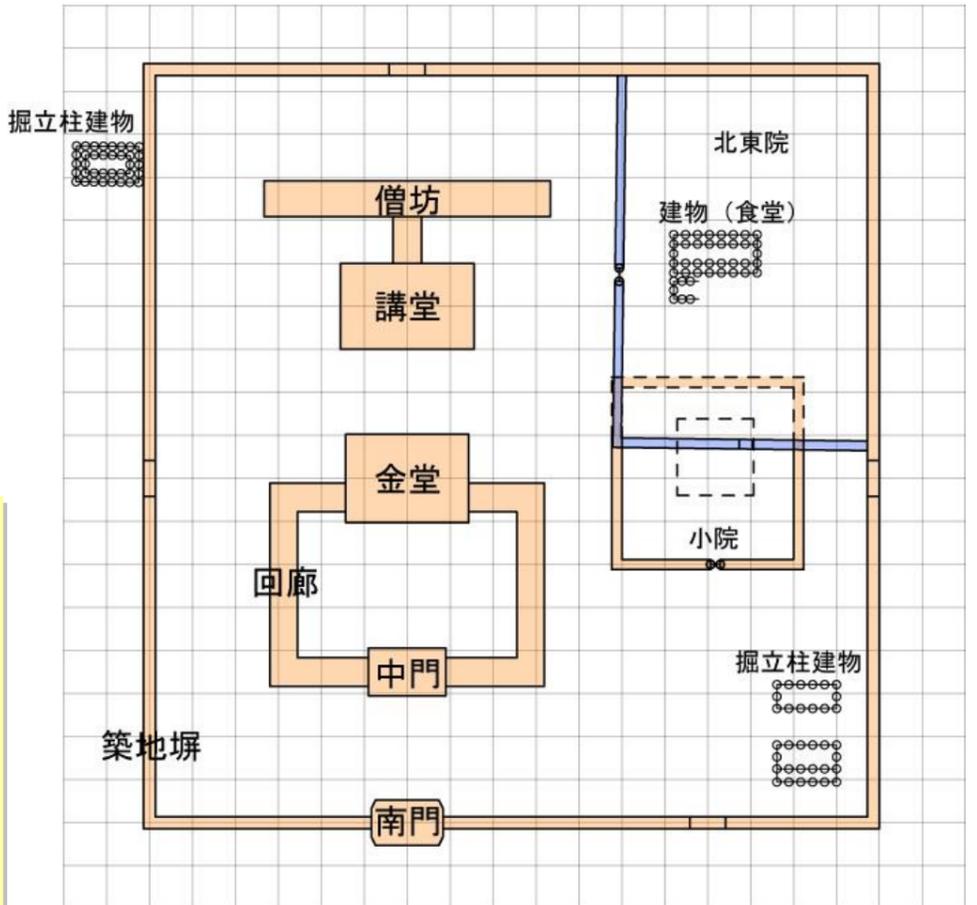
南面では埴列に加えて、同じく埴が並べられた約1.8m四方の張り出し部分が2箇所見つけられました。これらは階段の基礎にあたり、南面中央及び東の階段に相当すると考えられます。それぞれの東辺を除いては破損品が使用されており、元はさらに幅の広い階段であった可能性があります。

さらに東・西・南面には瓦や埴が積まれている部分が見つかりました。これらの瓦埴列は、長軸端や短軸端をそろえて並べられており、軒丸瓦の瓦当面向外側に向けているものもあります。東面では埴列の真上に位置するのに対し、南面では埴列の10～20cm内側に並べられています。



これらの埴列や瓦埴列は基壇化粧の一部で、講堂基壇の廃絶時の状況を表しています。講堂基壇の維持修繕が途絶えた時期は10世紀以降のことと考えられ、様々な部材を補って、やや統一感に欠けた基壇の状況が想像できます。

創建時における基壇の構造を留めていると考えられるのは台形埴による埴列や南面東階段の東辺部分であると思われます。



**北東院・小院** 北東院は8世紀末から9世紀初頭にかけて国分寺の大規模な修理が行われたときに新たに設けられた東西63m・南北93mほどの区画で、その地上部分は築地塀であったと想定されています。小院はその南に張り出すようにして見つけた東西45m・南北30mの区画ですが、北東院との関係が不明でした。

今回の調査では、小院東辺の溝が一部北東院と重なって検出され、その切り合い関係から小院が北東院より先行することが推定できました。加えて小院内に一辺約27mの方形にめぐる溝が断続的に見つけられました。溝で囲まれた部分に建物があった可能性はあるものの、柱痕跡や掘込地業などはありません。未だ発見されていない塔跡の候補となりますが、塔の存在を示す直接的な証拠は見つかっていません。

**その他** 伽藍地を面する築地塀の角や鐘楼・経蔵推定地の調査を実施しました。築地塀の角部分については不明確ながら推定できそうです。鐘楼・経蔵推定地については残念ながら関連する遺構が見つかりませんでした。

出土した遺物には、土師器・須恵器・灰釉陶器・埴・鉄釘などがありますが、ほとんどが瓦類(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦・文字押印瓦)です。中でも注目されるのは鬼瓦と文字押印瓦です。



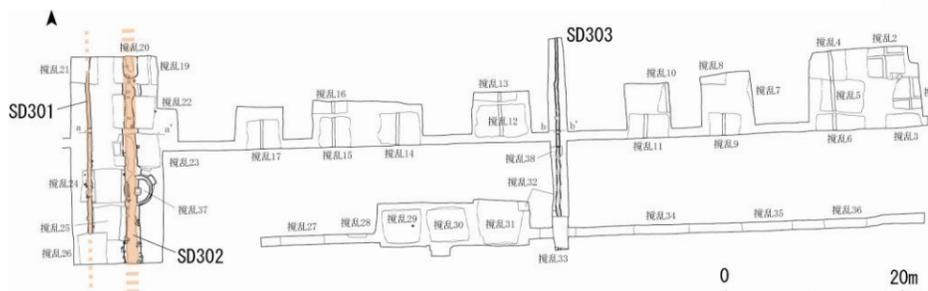
鬼瓦は小院内の溝から出土しましたが、下部と鼻を欠いています。文字押印瓦は15点出土しました。不鮮明なものも多く、判読しがたいのですが、「人」「中」「守」「上」「内」「勾」などの文字が読み取れます。また、今回初めて出土した押印瓦に「工」に見える瓦がありますが、単なる記号かも知れません。



## ■伊勢国府跡(第24・25・26次) 広瀬町

24次：平成20年6月16日～7月17日 土壤改良工事に伴う緊急調査  
 25次：平成20年10月1日～12月26日 学術調査  
 26次：平成20年12月18日～12月24日 学術調査

**第24次調査** 平行してのびる南北溝2条を確認しました。この地点よりも西側には、建物跡や溝の痕跡はもちろん遺構自体が極めて希薄であることから、この南北溝2条が北方官衙（方格地割）の西限だとされます。その場合、土塁などに伴う両側溝で区画が途切れ、その西側には道路などは敷設されない構造が復元されます。北方官衙の外周が確定できる場所は、この第24次調査区と、南北に近接する第14次・第18-2次調査区のみであり、他の外周を確認する際に参考となる情報といえます。



■第24次調査 遺構配置図

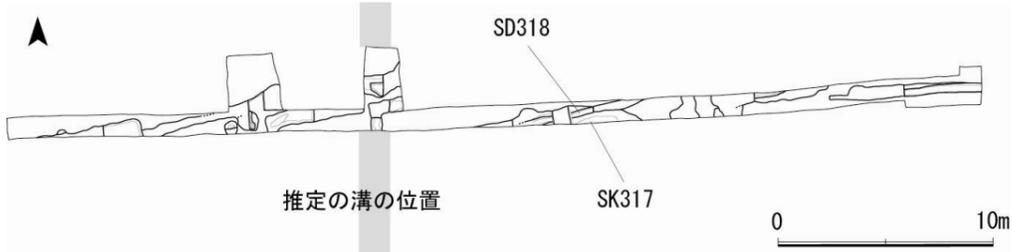
**第25次調査** これまでの北方官衙の復元案からは想定されていなかった区画溝などの存在が確認され、より一層複雑な構造をしていることが明らかとなりました。西側に隣接する、金敷が国府に関連する可能性が高くなってきており、金敷の性格を含め今後の課題の一つです。



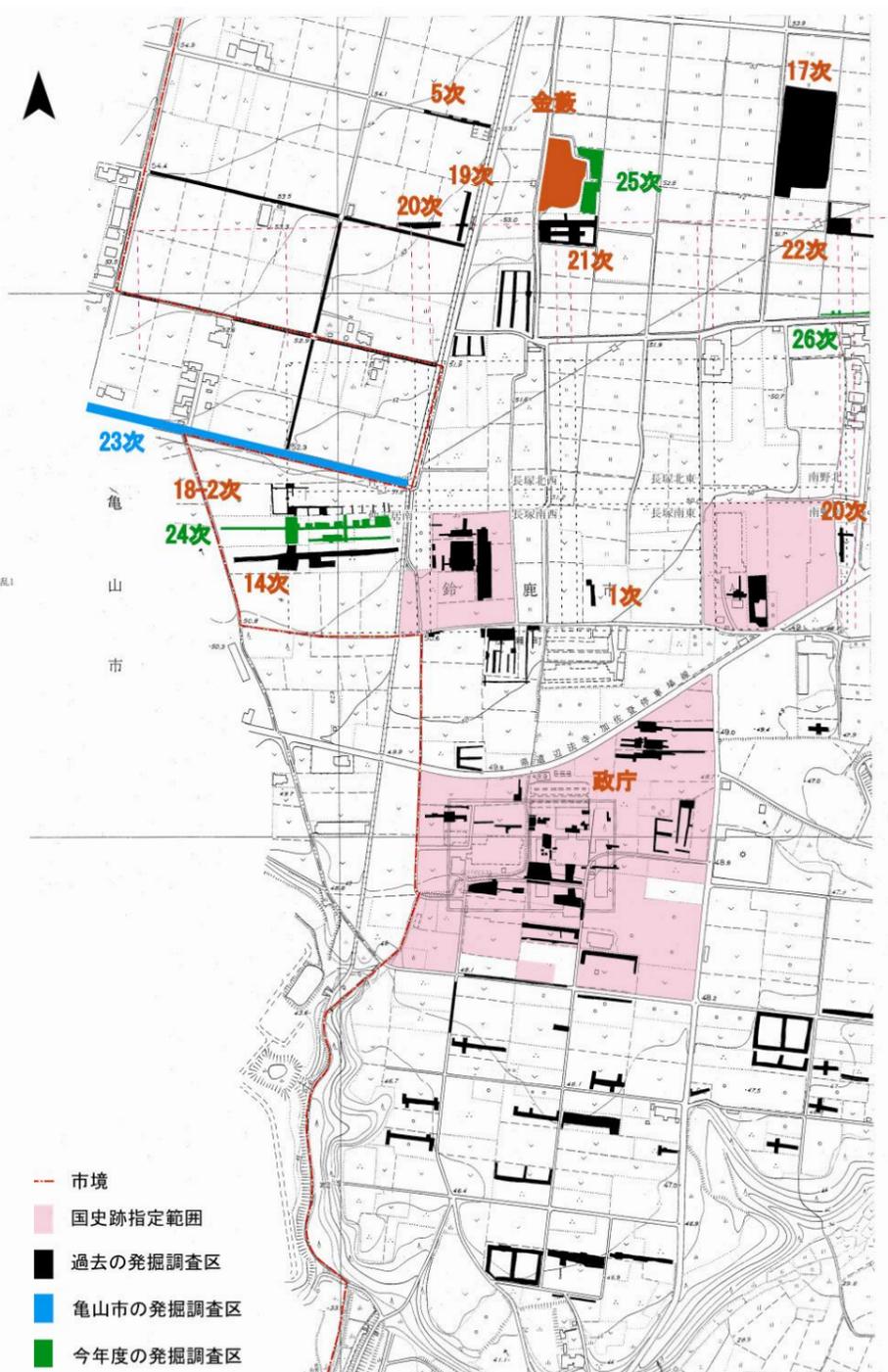
■第25次調査区 (隣接する森が金敷)

**第26次調査** 推定されていた北方官衙の北東隅を区画する南北溝の確認はできませんでした。北方官衙北東の1区画が存在しない可能性も考えられるようになってきました。ただし、北方官衙の北東側の発掘調査例は非常に少なく、従来復元されている区画自体が本当に存在するのかさえ不確定です。今後は、区画が実際にどこまで広がっているのかを一つずつ確認していくことが必要です。

多くの課題が挙げられますが、伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）は鈴鹿市にとって重要な遺跡であることは間違いなく、今後とも継続した遺跡の調査や保護が必要とされます。



■第26次調査 遺構配置図



■調査区位置図

## ■黄金伝説が残る「金敷(かなやぶ)」

「金敷」の記録がはじめて出てくるのは、1907年に書かれた水野福松氏による『高津瀬村誌』で、

「本村ノ仲土居ニアリ 古ハ木原長塚ト云フ 周囲水ヲ廻ラス長者ノ庭ト云ヒ傳フ 傳ヘテ云フ 古昔長者ノ亡ブルヤ金ヲ此ニ埋メ置キシ 若シ廣瀬村(ヒヘイ)ニ陥ルノトキハ之ヲ掘レト 其地ヲ見ルニ小高キ所ニ大石ノ横ハルヲ見ル 人云フ其大石ノ下ニアリト 反別一反六畝廿二歩」

として伝えており、これが現在知られている長者伝説の根拠となっています。さらに、鈴木敏雄氏は1933年の著書『三重縣古瓦圖録』の中で、

「又コ、ヨリ北約百米隔テ、字中土居ニ「カネヤブ」ト稱スル個所アリ。横約二十二米、縦約十四米ノ長方形地ヲナシ、其内ニ高約二米ノ二丘ヲ存シ恰モ一見古墳状ヲナシ、側ニ約七十疋程ノ自然石一個現ハル。里人云、此下ニ鐘ヲ埋メタリ。廣瀬退轉ノ期來ラバ之ヲ掘出セト。此ノ地ニモ同種ノ古瓦ヲ多量ニ出ス。或ハ經塚ノ類カ」

と述べています。はじめて、金敷の性格について述べたものであり、断定を避けながらも古墳や経塚などの可能性を示唆しています。

なお、最初に長者屋敷遺跡を発掘調査した藤岡謙二郎氏も「金敷」の重要性を認識していて、発掘調査による確認作業を実施しようとしたようですが、諸般の事情から断念しています。

このように、いずれの研究者も金敷の重要性を認識してきましたが、これまでに発掘調査など行われることなく現在に至っています。

## ■萱町(かやまち)遺跡 (第3次)

神戸八丁目

平成20年10月15日～11月6日 個人住宅建設に伴う緊急調査

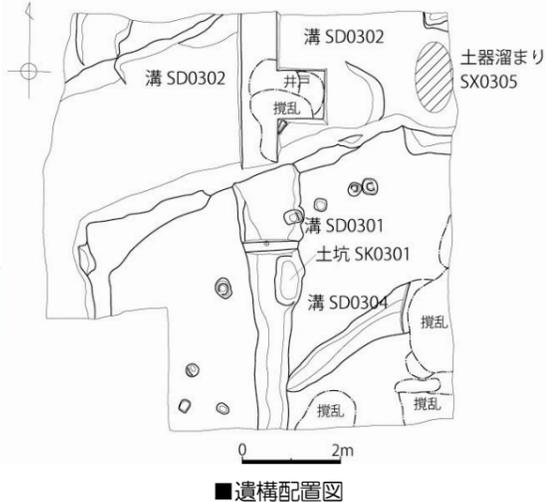
萱町遺跡は、鈴鹿川右岸に延びる低位段丘上に位置します。昭和17年、防火用水を掘削中に赤彩のある弥生土器が出土して、その存在が明らかになりました。発掘調査が行われたのは最近になってからで、平成16年に実施された第1次調査では古墳の周溝、奈良時代の土坑や中世の掘立柱建物と土坑が、平成19年の第2次調査では平安時代前期の竪穴状遺構や土坑が見つかりました。そして、今回の第3次調査では、溝3条・土坑1基が見つかりました。

**溝 SD0301** 調査地を南北に貫通する溝で、鎌倉時代の土師器・山茶碗、常滑焼が出土しました。溝内に長楕円形の土坑が掘られています。山茶碗細片が出土したのみです。

**溝 SD0302** 調査地東辺から西辺にかけて延長8.5mを検出しました。埋土は大きく2層に分けることができ、下層は弥生土器・古墳時代初頭の土師器を多く含み、少量の古墳時代後期(6世紀前半)頃の須恵器・円筒埴輪の破片を含んでいます。調査地中央から西寄りにおける上層は、奈良時代～平安時代前半の土師器・須恵器を多く含んでいます。



■土器溜まり SX0305



■遺構配置図

これに対し、東側上層の調査地東壁に当たる範囲では飛鳥時代の須恵器大甕・甑(こしき)・坏身・坏蓋、土師器などの破片が敷き詰められたようにまとまって出土しました。この土器溜まり SX0305 は土坑のような掘りこみが検出されず、埋没しかけの溝の窪みに完形品ではなく破片として遺棄されたような状態で出土しました。



■調査地全景(西から)

**溝 SD0304** 東西方向に延びる浅い溝で、延長3mを検出しました。遺物は出土していませんが、新しい時代の溝と考えられます。

今回の調査の成果の主要なものは**大溝 SD0302** の検出です。この溝は調査地が狭いため全体像が明らかではありません。下層の出土遺物は弥生時代後期のものが多く、須恵器・埴輪といった古墳時代後期遺物の出土量は乏しいです。この溝の性格として考えられるのは、

- ① 弥生時代後期の環濠または方形周溝墓の一部で、少量の須恵器や埴輪は周囲からの流入
- ② 古墳時代後期の方墳の一部で、弥生土器は周溝の掘削時に周囲の遺構が破壊されたことにより流入
- ③ 弥生時代後期の環濠または方形周溝墓の一部を利用して新たに築かれた古墳

という3例が想定できます。判断に苦しみますが、現時点では②の可能性が高いと考えています。

## ■富士遺跡 (第3次)

国府町字富士

平成20年10月31日～12月21日 共同住宅建設に伴う緊急調査

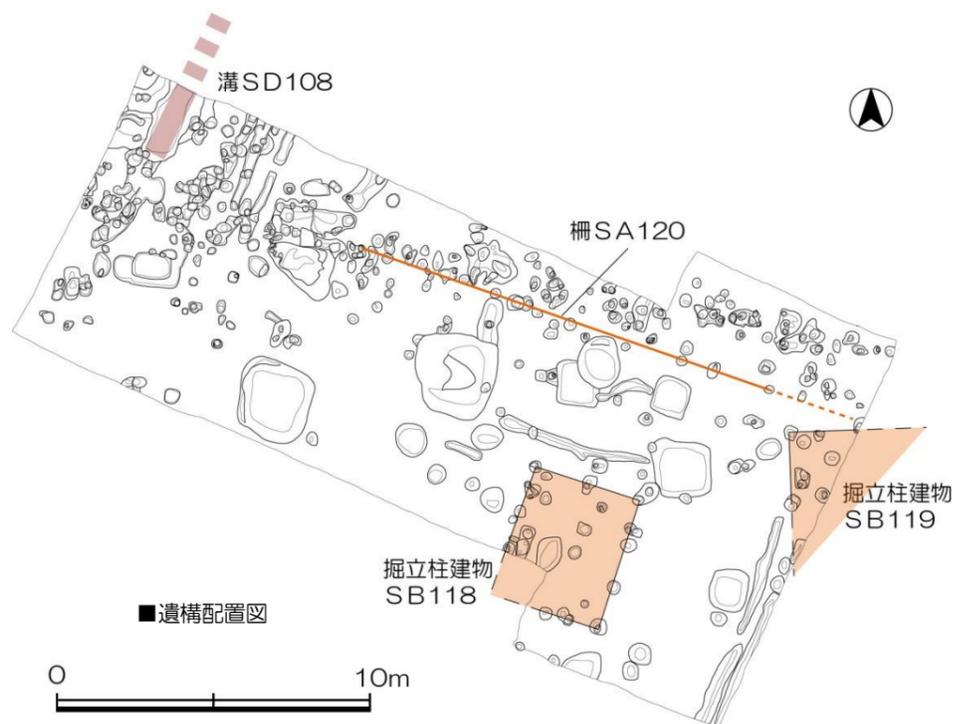
富士遺跡は鈴鹿川右岸の河岸段丘上に位置します。平成9年に第1次調査、平成18年には第2次調査が実施されています。第1次調査では弥生時代の方形周溝墓や中世の区画溝が、第2次調査では飛鳥時代の土壇墓(ことうぼ)や奈良時代の竪穴住居、古代の炉、中世の区画溝が確認されています。富士遺跡が所在する国府町は、その名の通り、伊勢国府の有力な移転先として推定されています。特に第2次調査で見つかった炉は、鋳型・鉄滓の出土から、国府関連の鋳造施設として想定され、注目されています。

今回見つかった遺構は、溝14条・土坑45基・柱穴51基・掘立柱建物2棟・柵です。本調査区は第2次調査区の南側に隣接するため、その結果を補完するものとして期待され、想定通り第2次調査の中世溝の南続きとなる南北溝を確認しました。しかし、古代の鋳造に関連する遺構は見つからず、鋳型・鉄滓などは出土しませんでした。鉄製品としては、柱穴から出土した鉄釘、柱穴及び土坑から出土した用途不明鉄製品のみです。



■見つかった土坑

本調査区では、古代の時期に東西方向の柵を設置することにより、南北の土地を明確に分けているようです。柵より南には、掘立柱建物・土坑が配置されています。点在する土坑については、8基確認しました。平面形が楕円形の1基を除き、他は全て隅丸方形を呈し、その規模は長軸1.2m以上と大型です。基底面は平坦に掘り込まれていますが、深さはまちまちです。また埋土の様子から、ほぼ同時期に一括して埋没したようです。これらの土坑に対しては、土壇墓及び祭祀遺構、鋳造遺構、粘土の採掘坑、牛馬に関連する南東隅土坑など広く想定しましたが、棺の痕跡もなく、祭祀行為に関連する遺物も出土しませんでした。特徴的な形体が見られる土坑ですが、現状ではその性格付けが困難です。



■遺構配置図

0 10m



■発掘調査風景

前期伊勢国府(奈良時代中期～平安時代初頭)は、鈴鹿川対岸の広瀬町にある長者屋敷遺跡と考えられています。本調査地は何らかの事情で廃絶した前期国府の移転先と目される後期国府跡推定地北側に位置します。出土遺物には、緑釉陶器・転用硯・灰釉陶器・黒色土器・製塩土器・古代瓦など、一般的な集落として片付け難い特徴的なものがあります。遺構には国府に関連する要素が見当たりませんが、これらの遺物は直接的ではないものの平安時代前期頃の国府との関連を挙げるすることができます。

## ■国分遺跡 (第34次)

国分町字北條

平成20年5月23日～5月29日 個人住宅建設に伴う緊急調査

国分尼寺跡の推定地である調査地は、鈴鹿川左岸の段丘上に位置します。これまでに、調査地から西100mの場所で発掘調査が行われ、国分尼寺の北を区画すると推定される溝が見つかりました。また、南西100mの地点でも調査が行われており、国分尼寺に関わる瓦が出土しています。このような周辺の状況から、今回の発掘調査も国分尼寺に関わる遺構や遺物の確認が期待されていました。

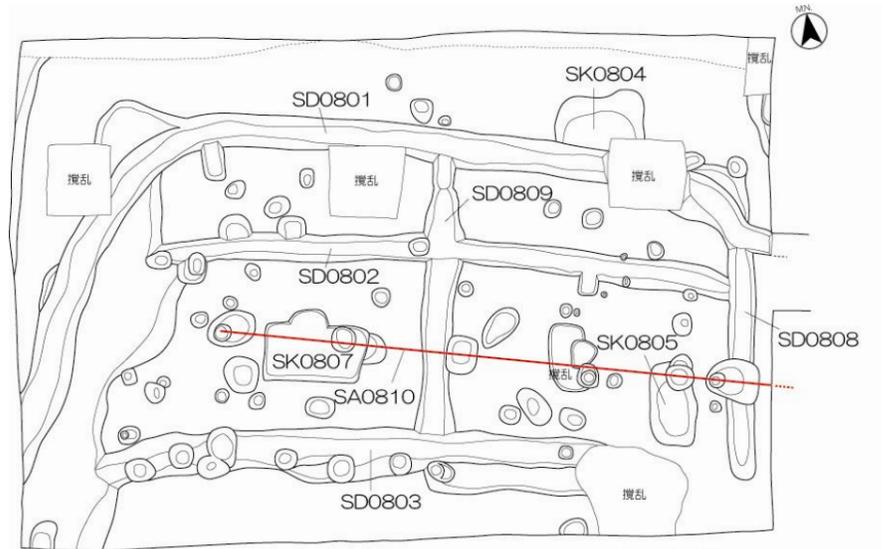
調査の結果、溝5条・土坑3基・柵1列・柱穴多数を確認しました。検出されたこれらの遺構のほとんどが近世以降の新しいものと判断され



■調査区 全景

ます。一方、出土遺物は少ないものの、大部分が国分尼寺に関わる瓦と近世あるいは近代まで下る陶磁器類で占められています。

残念ながら今回の調査では、期待された尼寺の北限を区画する溝を確認できませんでしたが、古代の瓦が出土していることか



■遺構配置図 0 5m



■発掘調査 風景

ら近くに尼寺の存在がうかがえます。また調査地の北側が急激に落ち込んでおり、後世に大きく造成されていることが確認されました。

## ■石薬師東遺跡 (第15次)

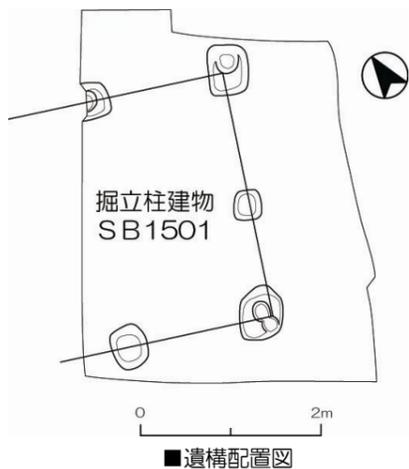
石薬師町字山起

平成20年8月7日～8月8日 個人住宅建設に伴う緊急調査

調査地は、鈴鹿川左岸の高位段丘上に位置します。この石薬師町字寺東から字山起にかけての一角には、戦前に数十基の古墳(石薬師東古墳群)が点在していましたが、戦時中に旧帝国陸軍の施設が建設された際にほとんどが墳丘を削平されてしまい正確な位置が不明になっていました。

しかし、平成5年から8年にかけて三重県消防学校の改築に際して行われた発掘調査において、古墳の周囲に巡らされた周溝(堀)が残っていることが判明し、46基の古墳が確認され、古墳に供えられた須恵器・土師器などの土器や埴輪などが出土しました。それ以降も、周辺の小規模な開発に伴って発掘調査が行われて、さらに10基以上の古墳が確認されています。

今回の調査地は、段丘上の平坦面から、東の浪瀬川の谷に沿う崖に向かって緩やかに下っていく斜面の途中に位置しています。石薬師東遺跡・石薬師東古墳群の東端にあたりますが、付近には石薬師東10・11号墳が存在したとされています。



■遺構配置図

範囲確認調査では、建築予定地の西側と北側に削平された古墳の存在が予想されたため建築範囲の西辺と北辺にあわせL字状に幅1mのトレンチ(試掘溝)を掘り、基盤層上面で遺構の有無を確認しました。

その結果、トレンチの範囲内では古墳の周溝などは確認できませんでしたが、西辺トレンチ南端で2基の柱穴が確認されたため、掘立柱建物が存在するものとして、



■掘立柱建物 掘削前



■掘立柱建物 掘削後

一部を拡張して本発掘調査としました。確認された掘立柱建物は、南北2間×東西2間以上の東西棟の建物で、主軸は真北から約24°東に振れています。柱間は、桁行がほぼ1.5m(5尺)で、梁間は不均等ですが1.35m(4.5尺)を意識していると思われます。柱の掘方は東妻の中間のものが0.4m×0.4mと小型ですが、その他は0.5m×0.35～0.45mの南北に長い隅丸長方形でした。埋土は炭を含む暗褐色シルトで柱の痕跡は残っていません。柱穴の間隔・形が小型で不揃いであることから一般的な集落に伴うものと考えられます。ただ、柱穴の埋土や周囲からも全く遺物が出土しなかったため年代を決定することはできませんでした。しかし、消防学校の発掘調査において、同様に東向き

の緩斜面で奈良時代の掘立柱建物が2棟確認されています。柱掘方の規模・形状などが今回調査された建物と似ていることから、この建物も奈良時代の建物である可能性を考えておきたいと思います。

### ■関連講座

講演会:「文化に育てられて -不易流行-」

講師:中森 成行(当館館長)

日時:平成21年3月29日(日)午後2時～

### ■入門講座

講演会:「城郭調査最前線!」

講師:亀山 隆氏(亀山市歴史博物館館長)

日時:平成21年5月9日(土)午後2時～



### ■発掘担当者による スライド説明会

第1回「伊勢国分寺跡」4月25日(土)午後2時～

第2回「沢城跡・伊勢国府跡」5月23日(土)午後2時～

第3回「岸岡山Ⅲ遺跡」6月27日(土)午後2時～

### ■速報展パンフレット

「発掘された鈴鹿2008」

会期:平成21年3月20日(祝)～6月28日(日)

編集:鈴鹿市考古博物館 印刷:(有)中村特殊印刷